

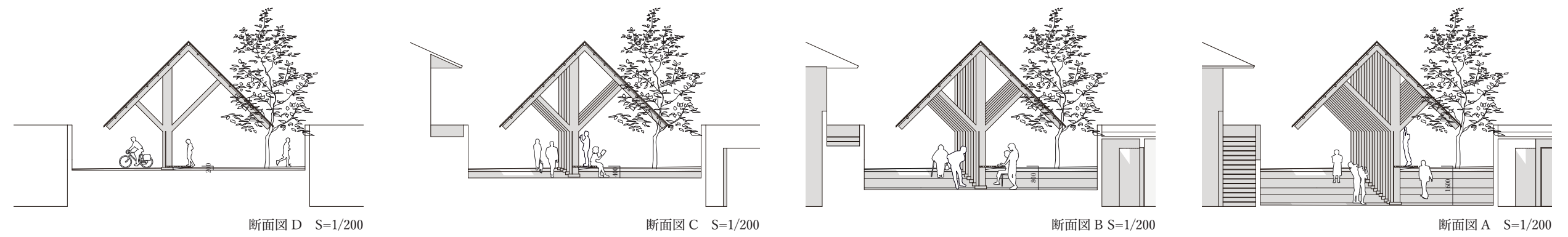
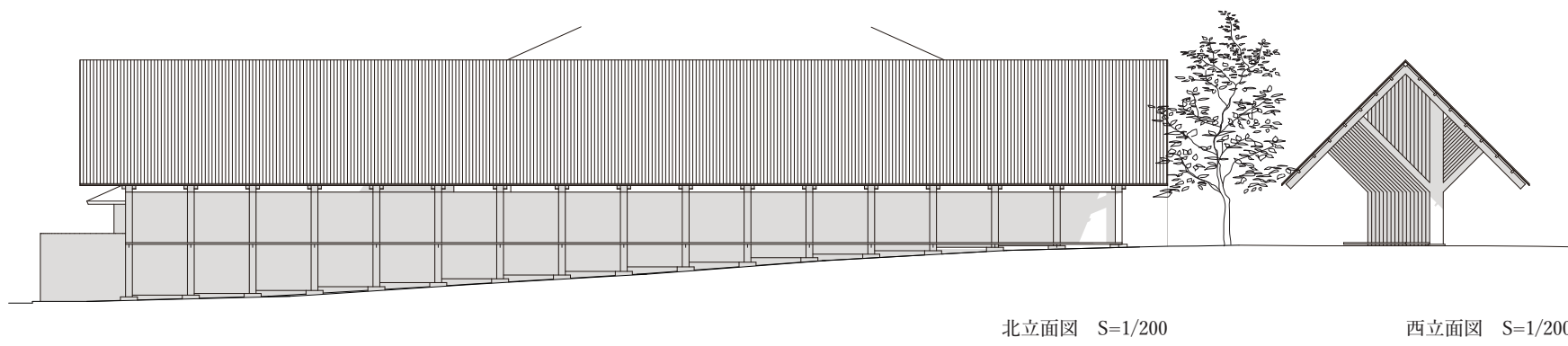
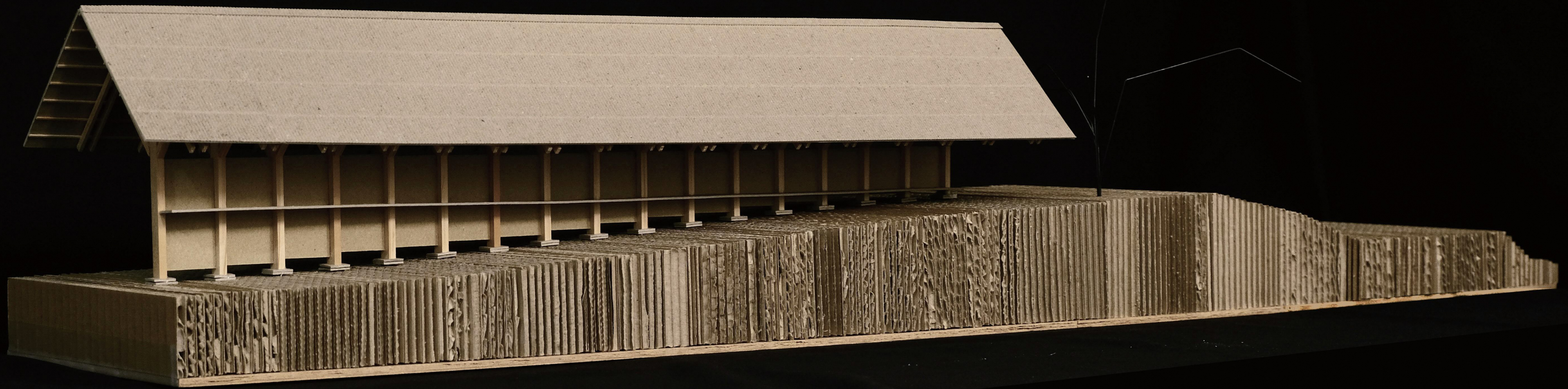
斜めを歩く

— 疏水をつなぐズレの中の空間 —

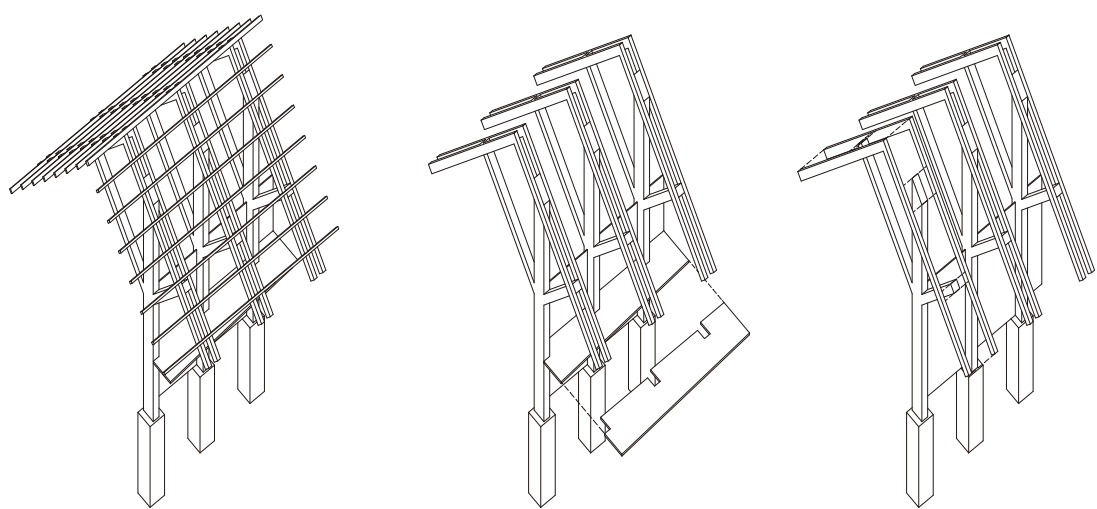
基盤の目状に計画された京都市の中で、水の流れによって形成された曲線を描く二つの通りがある。北部から流れる賀茂川と、市民の生活用水として活用されていた琵琶湖疏水第二分線は、本敷地で交差する。

賀茂川によって疏水は分断され暗渠となり、平面と断面それぞれに「ズレ」が現れる。2つの「ズレ」を2つの「斜め」によってつなぎ、新たな「道」を歩くことによって都市の中の大きな流れを感じることができる。

ここにブックギャラリーを計画した。斜めの地表と水平な面、そして少しずつ変化しながら連続する壁を持つこの建築では、「ズレ」のなかに空間が生まれ、人々が他者や本、ギャラリー、そして都市と関わるきっかけとなる。



1. 敷地 京都市左京区下鴨
賀茂川と疏水の交差点。疏水は暗渠となり、賀茂川の下をくぐることで対岸の紫明通へと流れてゆく。暗渠となった疏水通りは水流の代わりに並木が紫明通まで続いている。しかし並木の延長線は、鴨川を挟んで平面的にわずかな「ズレ」がみられる。敷地東側の下鴨西通と賀茂川の河川敷では高低差がおおよそ1800mmあり、周辺住民の抜け道として利用される敷地北側の路地では、階段によって高低差を解消している。賀茂川は人に限らず様々な生物が行き交い、緩やかな時間が流れている。地域住民の生活動線である下鴨西通との接続が、新たなコミュニケーションの場となる。



2. 斜面と水平面
疏水通りから賀茂川への連続性を持たせるため、高低差1800mmの段差を新たな斜めの地表へと再編した。屋根の下細長い水平面は地表の傾きを顕にしながら、地表のレベルによって腰掛けや机、カウンターなど様々な用途に寄与する。

3. 構造ダイアグラム
傾斜を持つ地表に対して、最小の要素で屋根をかける。半屋外という条件から、耐久性に優れたヒノキ材を使用して、やじろべえの架構形式によって軽やかに見せる。一本の柱と方杖が連続する中で少しずつズレていくことで、地形の変化に意識的になり、空間体験を豊かにする。

